

(2009年10月27日ご講演)

2. 社会としての『郊外』—その過去・現在、そして未来—

若林幹夫委員

私の専門は社会学であり、実務的にまちづくりや都市開発に携わってきたわけではない。東京工業大学の助手をしていた時に、街づくりに関係する研究室にいたことはあるが、人間の社会や文化にとって都市とは何かという、比較的抽象度の高い文明論や比較社会的な仕事を中心に取り組んできた。

今回、この委員会に声をかけて頂いたのは、こうした仕事の関係ではなく、2年ほど前に『郊外の社会学』という本を書いたことが縁になったのかと思う。この本は、私がこれまで取組んだ仕事の中で最も同時代の経験に具体的に即したものであり、同時にある意味で個人的な仕事である。

私が都市について研究しようと思った切っ掛けのひとつは、私自身、東京の郊外町田で生まれて育ったことにある。自分が生まれ二十歳頃まで育った郊外の環境、風景、そこで自分が感じた街の感触に、私はある種の物足りなさを感じていた。非常にのっぺりとしていて、住宅がダラーンと並んでいる。子供の頃は雑木林や田んぼが沢山あってよく遊びに行ったのだが、だんだんとそのような所が無くなって、あまり楽しくない。年齢にもよると思うが、むしろ都心、渋谷や新宿の方が面白い。大学生になって東京の街を歩くようになると、都心部でも大通りから一歩中に入ると神社やお寺、昔から続いている商店街など、かなり微妙な風情や雰囲気をもった社会的な空間があり、その土地で人々が生きてきた記憶というか、場所性があるなどという感じがした。そのような「場の実質性」のようなもの、それをコミュニティと呼んでもよいのかも知れないが、コミュニティの記憶や意識の核になるようなものが、町田のような郊外のベッドタウンには無く、のっぺりしているという感覚があつて、そこから都市とは何かということを考えはじめたわけである。

一方で、いろいろ考えてくると、こうした郊外ののっぺりした、あるいはきわめて散文的で単調に見えるような風景の中にも、日本の高度経済成長期において人々が — そこに住んでいる人たちだけではなく、そこを開発したり、ニュータウンの計画を立てたり、住宅産業の中で新しい家の形を考えたりした人たちも含め — さまざまな「夢」をみていたのであろうと思ひ、それを重ねて自分の半生も振り返るような形で、郊外とは何かということを考えてみたいと思った。これが、私が郊外について考えてみようと思った切っ掛けである。

本日の報告も「社会としての『郊外』」というちょっと奇妙なタイトルを付けたが、物理的な場所だけではなくて、そこで暮らしている人々の「ライフ・スタイル」、「社会意識」、「価値

観」、「夢」などを含んだ場所として、つまり、人々が家族や地域の他の人たちと、あるいは個人として生きていく社会的な場としての郊外のあり方について考えてみたい、という趣旨のタイトルであるをご理解頂きたい。

1. 現代日本の郊外イメージ

危ない郊外、不安な郊外

まず、「郊外」という言葉についてステレオタイプのように言われるイメージに対する抵抗というか、少し違うのではないかという思いが私にはあるので、その辺りの話から始めたい。

「郊外」という言葉には、今日いろいろイメージがまわりついていると思う。消費社会研究家の三浦展氏が、比較的最近、『下流社会』という本を著し、ジャーナリスティックな面でも話題を呼びベストセラーとなった。この本で著者は、一億総中流というのが無くなって一部のお金持ちと下流化した人たちに分かれていき、「下流化した人たちには生きる意欲そのものが無い」と言っている。しかし私は、果してそういうことを言って良いのだろうかと思っている。

この話とやはり三浦氏が『ファスト風土化する日本』などで展開している「ファスト風土論」とは関係している。郊外のショッピングセンターやファストフード店が街道沿いに広がっているような風景を、三浦氏はファストフードにひっかけて「ファスト風土」と呼び、休みになるとジャージを着てサンダルを履きダラッとショッピングセンターに買い物に来るような人たちや、近くのカラオケ店で盛り上がっている人たちのことを、彼はたぶん「下流化した人たち」と呼んでいるのだと思われる。

三浦氏の議論は地方都市の郊外の話が中心であるが、それは東京近郊の郊外にも言えることだというのが三浦氏の立論である。地方農村部の郊外化と中心市街地の没落が地域固有の歴史や伝統、価値観、生活様式をもったコミュニティを崩壊させ、日本中どこに行っても同じものが食べられるファストフード店と同じように、全国一律の均質な生活環境を成立させているとの主張である。現代社会や現代都市が生み出した社会問題として「ファスト風土」というものがある。東京や大阪の大都市郊外でまず成立したような消費やライフ・スタイルが日本全国に広がっていった。それが今や問題であるということを三浦氏は主張している。

なぜ問題なのかというと、そこでは、まず人々が故郷を失っている。東京の郊外の場合は高度成長期に地方から沢山の人が流入してきたが、地方の郊外には行かないので故郷の原風景や地域社会というものが失われていく。そこで共同性が欠如する。それから、郊外では大規模開発や、ミニ開発が波状的に行われる場合もあるが、年齢や所得、家族構成などが比較的均質的な社会が成立する。均質的な社会の中では、均質であるが故に微細な際へのこだわりによって人々の間の競争が激化する。例えば、子供の学歴競争や子供中心の消費文化などが展開していく。自動車依存が高くなり子供が街を歩かない、街で遊ばない。こうなると子供の社会化が

阻害され、その結果、地域社会、人と人との繋がりや絆というもの、あるいは異質な人々が相互に協力し合う社会のあり方が解体していくと三浦氏は指摘している。

高齢化・少子化・空洞化する郊外

「ファスト風土論」は比較的最近語られた郊外のイメージの典型のひとつだと思うのだが、もうひとつ「社会問題的に語られる現代の郊外の問題」がある。前回の委員会で東京圏の人口の変化について報告があったが、それとも関連する話である。現在、既に郊外あるいはニュータウンでは急速に高齢化が進んでいる（少子化は地域によってだいぶ違う）。高度経済成長期に大量の人々が地方から東京圏に流入してきたのだが、基本的なパターンとしては、都心近くにまず単身者として転入し、結婚して子供ができるのを契機に郊外に住むようになった。こうした人々の受け皿として郊外のニュータウンや郊外住宅地が出来上がった。「住宅双六」という言葉が70年代にはあって、トイレ・台所共用のアパートからはじまって、結婚して夫婦二人で住めるもう少し大きなアパートに移り、それから団地に入って、賃貸・分譲マンションを経て、できれば将来は一国一城の主で一戸建てを手に入れ、それで上がり、というものだ。そのような「上がり」に至るプロセスとして郊外のニュータウンあるいは一戸建ての分譲住宅地が高度成長期の後半に大量に開発された。その主体だった人たちが一斉に定年退職し始めて急速に郊外の高齢化が進んでいる。

重松清氏の小説に『定年ゴジラ』というのがある。同じ頃に郊外住宅地に入居した人たちが、会社で働いている間は、家には寝に帰っているだけで、相互に全く面識がない。定年して帰ってきた途端にやる事が無くなるから散歩をはじめ、今まで知り合いではなかった近所の人たちと知り合いになっていって、実は同じような境遇で同じように生きていた人たちが沢山いるということを感じ、それならば地域で60歳以上の男はどうするのか、という小説である。この小説は以前NHKでもドラマになったが、このような小説にも描かれているような人たちがこれから大量に出てくる。

また、核家族化が進んでいるので、現時点では郊外の二世が自分達の生まれた郊外に世代交代するように住むという形には必ずしもなっていない。子供たちは生まれ育った所から外へ出ていき、なおかつ親は長生きするので、沢山の年寄りが郊外に住むこととなり、世代交代が停滞している。こうした高齢化が、現代の郊外における「問題」だというわけだ。

何年か前の朝日新聞社の『AERA』という雑誌に載っていた言葉で、これも三浦展氏が最初に言われたようだが「郊外病」という言葉が一部ではあるらしい。郊外では、居住者が高齢化していくと同時に、市街地、都市インフラも老朽化していき地価が下落する。とりわけ高度経済成長期には都市への通勤者が大量に生みだされたので、電車に乗って都心から1時間、それからバスで30分などという通勤条件が相当悪い所にまで郊外住宅地が広がっており、こうした所は地価が下落する。このため、ベッドタウン化に依存していた多くの郊外自治体の場合、

特に企業誘致等があまりうまくいかなかった地域の場合には、税収が不足して自治体財政の非常に大きな負担になっていく。それを「郊外病」という言葉で表現している。

高齢化・少子化していく中で空洞化していく郊外。「都心回帰」という言葉と対になるような形で、郊外の空洞化ということが社会的な問題として語られていたりする。

「理想」としての郊外住宅地

最近、このように語られている郊外であるが、30年位前までは郊外はある種の理想の場所として語られていた。戦後の持ち家政策の中で、「住宅双六」の上がりとしての「庭付き一戸建て」という言葉を聞くと、私が小学生の頃に流行っていた小坂明子の『あなた』という歌を思い出す。「真赤なバラと白いパンジー、暖炉があって、レースのカーテンがかかった家で愛する人と一緒に暮らしたい」というような歌であったが、例えばアパートに住んでいた人たちが、いつかはそのような所に住みたいと共感したのだと思う。

都市化、産業化していき、核家族化していく社会の中での生活で、やはり理想や夢を実現する場所として郊外住宅地というものが成立していった。都心回帰と言われる現在でも、このイメージは一定のリアリティを持ち続けているのではないかと私は思っている。

先程郊外の二世・三世は転出していくという話しをしたが、私自身も郊外の二世のような立場にある。つまり、私の父方の家は祖父の代までは農家（地主）だったのだが農地改革で農地をすっかり無くし、父とその兄弟の代から雇用労働者になった。両親の代はサラリーマン化しているので、私自身は旧住民の子供ではあるけれど、同じ年代で地方や都心から流入・流出して来た私の同世代のサラリーマンの家とあまり変わらない文化の中で育ったわけである。こうした郊外の二世・三世にとっても、やはり原風景あるいは住み方や生き方の文化の基本的な形として、郊外というものは依然としてあるのだと思う。

2. 郊外をどうとらえるか

今日の報告では、「問題としての郊外」と「理想としての郊外」のどちらが正しいかということではなくて、むしろ問題と理想の両方に足をかけながら、人々は郊外という現実を生きていくということについて考えてみたい。

この郊外というのは膨大な人口数を抱えていて、特に東京都市圏を考える場合には郊外の存在を無視することはできない。先程、自分の生まれ育った地域の風景の平板さとか退屈さがあまり好きではなく、それで都心について研究し始めたという話しをしたが、ごく普通の散文的な現実が現代の社会に何をもたらしたのかということ、定性的・定量的な分析の話だけではなく、社会のライフ・スタイルや価値観の問題として考えていきたいと思う。

「郊外」という言葉

東京あるいは日本の郊外の話をする前に、日本の郊外化のモデルになった海外の事例と、「郊

外」という場所の言葉のイメージを確認しておきたい。「郊外」は英語で「suburb」であるが、suburb というのは“sub+urbs”で出来上がっていて、“urb”というのは urban の語根で、ラテン語の“urbs”すなわち、城壁に囲まれた居住地を意味している。例えば、ヨーロッパの中世でも、城壁に囲まれたブルクの近くに商人たちが集って新しく居住地をつくるとスブウルビウムと呼ばれた。スブウルビウムというのは“urb”に従属した場所ということである。つまり、郊外という言葉が表しているのは urbs の“sub”、つまり「外」である。このように郊外は都市との関係において成立し、都市が無ければ郊外も無いわけである。現代の英語では「suburbia」という言葉をよく使うが、この言葉には「郊外」、「郊外住宅地」、「郊外居住者」だけではなく「郊外族」という意味もあり、時には揶揄的な意味を持つ表現でもある。

先程、三浦展氏の郊外社会批判の要旨を挙げたが、これと同じようなことが 1950 年代頃のアメリカなどでも言われていて、ウィリアム・H・ホワイトの『ホワイトカラー』、デイヴィッド・リースマンの『何のための豊かさ』といった本の中で当時の郊外の問題が語られている。リースマンの『何のための豊かさ』あるいは『孤独な群集』は、日本で 1960 年代に加藤秀俊氏が翻訳して紹介しているが、当時はリアリティが伝わっていなかったのではないかという感じがする。今になって読み返してみると、たぶん現在の方が我々にとってリアルではないかと思う所がある。

「立場なき場所」としての郊外

私が専門としている社会学の中で「郊外」という概念をどう捉えているのかということ、実は、「郊外」という概念は、社会的には定式化された概念ではなくて、郊外論という形での議論がこれまでほとんど無かったと言ってもよいと思う。『日本都市社会学年報』にこれまで私 2001 年と 2009 年に原稿を書いているのだが、これまでに出了た 27 号の同年報のうち、たぶん郊外をテーマにした号というのはこの 2 冊だけであると思われる。

2001 年の年報は、学会の大会を基につくった号であるが、その時に報告した誰もが、郊外
の概念は、都市社会学の中では定式化されていないという話から始めた。調査分析に際して地域という概念は簡単で、ある自治体を調査対象としてとればよく、そのなかで都市というのは、市になっている所を調べるか、あるいは DID（人口集中地区：Densely Inhabited District）人口などの一定の人口条件を満たしている所を都市と考える。もともと日常では、都市という言葉よりも郊外という言葉のほうが馴染みのある言葉だと思う。大学で授業をしても「都市という言葉が意味することってよくわからない」と学生に言われるのだが、郊外は日常の実感の中にある言葉なのでじっくりくると思う。しかし、社会学では郊外概念というものがきちんと定式化されていない。

社会学・地理学を問わず「混住地区」という言葉がある。今まで農村部であった所に都市的な人口（大都市圏に通勤する人たち）が入って来て混住地区（zone of mixed residence）になっていく。しかし私は、「混住」というのはリアリティとしてはちょっと違うのではないかと

思う。気持ちとしては都市でも農村でもないという意味なのだろうが、これがうまく混ざり合っただけの地域になるというのは、実は郊外のあり方をうまく捉えていない。新住民・旧住民という言葉に典型的に表れているように、むしろいくつも分断線が郊外の中に走っている。さらに、新住民の間にも、異なった層がパッチワークのように住んでいるのが郊外という場所だと思っている。

歴史の中の郊外

アメリカにおいて郊外化が進んだ最初の時代には、「ブルジョワ・ユートピア」という言葉で呼ばれたりした、都市に通勤するお金持ちのための高級な別荘のような郊外住宅が建てられた(図表1)。これらはアメリカ・イギリスの都市史の研究の中では「古典的郊外」と呼ばれたりするが、近代都市化の中でブルジョワ階級が都市郊外へ退避して、ブルジョワが自分たちの生活の理想を実現する場所としての郊外をつくり出したわけである。このような郊外のあり方というのは、日本でも例えば、田園調布などが典型である。大正期から昭和初期の郊外住宅地の歴史を考えると、比較的裕福な都市で働いているホワイトカラー層のための、ある種の別荘のような場所としての郊外というものがつくられ、それが郊外の本原のひとつとなっている。つまりそこでは成功者のコミュニティとしての郊外というものがあつた、その背景には近代的な都市交通網の整備があつた。

例えば、ニューヨークで最初の通勤者・サバブと言われている場所における通勤網はフェリーである。フェリーでマンハッタン島へ通勤する。また、橋が架かって自動車あるいは鉄道といった、近代的な都市交通網があつてはじめて成立していくような場所が郊外であつた。

戦後のアメリカの郊外を代表する「レビットタウン」(図表2)は、戦後の復員兵のニューファミリーを受け入れるための大規模な郊外住宅地であつた。この開発は、ウィリアム・レビットという不動産業者に主導された。先程の古典的な郊外はお金持ちの夢の空間であつたが、レビットタウンの開発により、郊外が大衆化し、大衆にも夢が持てるようになったのである。

先程、リースマン、ホワイトの話をしたが、1950~60年代にかけてアメリカは「豊かな社会」と呼ばれる局面に入ってくる。豊かな社会のホワイトカラーの生活と文化の舞台としての郊外、同時にそれは、そうした人々の俗物性、通俗性という面から揶揄的に「サバービア」という言葉で呼ばれたりするようにもなつたのである。

日本における郊外の「はじまり」

日本では大正期から昭和期に移行した頃、アメリカやイギリスのブルジョワ・ユートピアに範をとつた郊外住宅地が田園調布や国立に広がっていく。それ以前には、明治の終わり頃を舞台にした夏目漱石の『それから』に、こんなことが書かれている。

「最低度の資本家が、なげなしの元手を二割乃至三割の高利に廻そうと目論んで、あたじけ

なく拵え上げた生存競争の記念（かたみ）」として、非常に劣悪な家が東京の場末に広がっている。

これは市ヶ谷の辺であるが、当時は市ヶ谷も東京郊外であったので、この種の住宅が散点していて、これを「敗亡の発展」とこの小説の主人公の代助は名づけている。戦後にもニュータウン政策などが是正の対象として考えようとしていた都心のスプロール現象が、すでに明治時代に、今や都心部となった新宿区などで展開していて、これに対する改善策として田園調布や目白文化村などの住宅地がつくられたわけである。

田園都市株式会社の洗足田園都市（田園調布ができる以前、最初に田園都市株式会社が開発した住宅地）の宣伝をみると、そこでは都市の理想が謳われている（図表 3）。問題としての郊外と理想としての郊外というのは、日本の郊外化の歴史の最初の段階からあったわけである。ところで、このパンフレットはなかなか面白い。「煤煙が飛ばず」とか、「真の絶好の保健地」、「常住の避暑避寒地」と書いてあるが、洗足は今の目黒区であり、そこが別荘地のようなものとして語られていて、「文化生活の趣味を望まれる方は田園都市へ御住み下さい！」とか、「田園郊外の趣味を享樂し、文明の施設を応用できる地はほかにありません！」などという形で展開していたのは、日本の郊外住宅地の原型を考えるうえで興味深い。

私は今、千葉の流山という所に住んでいる。流山に住むようになったのは、当時筑波大学に通勤していたので、つくばと東京の間に住もうと思ったからである。当初、流山の初石という所にアパートを借り、アパートの家主の当時（1998年）90歳位おばあさんと立ち話をしていたら、東京の神田辺りで生まれ育った方らしいのだが、「私は別荘かなにかにしようと思ってここの土地を買ったのよ」と言う。「当時は松林ばかりでね、震災で疎開をしなければいけなくなってここに越してきたんですけれど、ところが何も無くてね」という話を聞かされた。そのような都市の見え方の中に、まるで別荘地のような洗足の田園都市も成立していたのだと言えよう。

戦前期・戦後日本の郊外

戦前期の郊外は、まず、スプロール化していく郊外であった。そこにホワイトカラーの生活の実験場としての郊外が現れ、欧米の古典的郊外や田園都市（もっとも日本の場合にはハーワードの田園都市とは違って、都市的機能は都心に置いたまま、居住地区だけを田園都市として実現）をモデルとしたプランが広まっていった。また、別荘地のような郊外住宅地、同時に、下水道、電気、ガスなど、近代都市インフラを実験的に取り入れるという試みも取り入れられた。

イギリスのエベネーザー・ハーワードの提唱した田園都市の場合には、多摩ニュータウンも初期ではそのような理念が追究されていたのだが、職住隣接型である。企業を誘致し、近くで働けるような居住地を大都市周辺に「都市と田園の結婚」という形で造ろうという理念であった。

これに対して戦後日本の場合は、社会復興と社会構造転換（農業社会から産業社会へ）が背

景にあった。絶対的な住宅不足があり、都市における無秩序な郊外地域の拡張が進んでいくスプロールの拡大がみられた。そこで、新興住宅地、ベッドタウン、団地、ニュータウンという言葉などが郊外化のキーワードとして出てくる。住宅不足を解消し、なおかつスプロールによる劣悪な住宅地の増加を抑えるために、ニュータウン、団地を一定の計画のもとにコントロールして郊外化が進められた。

勿論、それがうまくいった部分とそうではない部分がある。その中で大衆消費社会化する現代社会の夢と現実の空間としての郊外、また同時に、先程私がのっぺりした感じがしたと述べたように、歴史がない郊外が形成されていった。大規模開発であろうがなかろうが、もともとその土地にあった田畑や祠などを均して、階段状の土地を造成して大量の住宅地をつくり上げていくわけであるから、そこから土地の歴史というものが消去され、「現在」しかないような場所として郊外というものが広がっていった、ということである。

戦後日本の郊外化：東京圏の場合

地理学者の江崎雄治氏の研究（図表 4）により、戦後日本の「郊外における人口の自然増と社会増の推移」をみると、首都圏に人口が沢山流れ込み、子育て世代も入ってくるので、郊外に子供が生まれ自然増もみられるが、やはり大量の人々が流れ込む社会増によって、郊外人口が劇的に増えていくのが分かる。

例えば、私が生まれ育った町田市では、70年代に市民祭が始まったのだが、そのお祭は毎年、その年の町田市の人口を冠に付けて「～万人の個展」という名前でおこなわれていた。始まった時は確か「23万人の個展」だったのが、24万人、25万人、26万人と毎年1万人ずつ人口が増えていった。当時、町田市は「団地のまち」と言われていて、市長がもう団地は受け入れられないということを言い出すなど、結構問題になっていた。そうした状況が東京周辺で進んでいたわけである。

次に、都市社会学者の牛島千尋氏の「通勤率からみた郊外地の変化（1965～1995年）」（図表 5）をみると、東京23区への通勤率10～30%までの所で、65～95年にかけて郊外と呼べる地域が拡大し郊外リンクが広がっているのが分かる。ただ、こうした研究の場合、東京の場合はどうしてもまず23区への通勤率でみようとするが、横浜や千葉への通勤者もいるので、それを入れるともっと広大な広がりが出てくる筈である。

また、倉沢進・浅川達人編『新編 東京圏の社会地図』により（図表 6）、1975年と1990年の東京周辺の地域区分をみると、これは国勢調査をベースにした郊外のあり方であるが、「人口生産・ホワイトカラー地域」、「人口再生産・ブルーカラー地域」、「人口再生産・工業地域」あるいは「郊外高級住宅地域」が、農村・漁村を周辺に押しやりながら広がってきているのが分かる。

立教大学の都市社会学者松本康氏の議論によると、東京の郊外化には、第一次郊外化、第二

次郊外化と基本的に二つの波がある。1965～85年にかけて第一郊外化が進み、高度経済成長期とその後の時代に郊外の人口が増大している。85年頃に一旦終息しそうになったが、都心の地価高騰によって再度郊外への人口流出が開始され、それが95年頃に一段落する。

91年以降の一段落は、必ずしも郊外に住んでいた人が都心に戻ったということではなく、これまで続いてきた単身者の都心への流入がまずあるわけであるが、都心に流入した単身者がその後、郊外に出ていかなかったということのようである。これは、結婚した後も都市に居住することを選ぶ、あまり結婚しなくなって都市に住み続ける人たちが増えてきたということである。我々が今生きている時代は第二次郊外化後の時代ということが言えよう。

「未来都市」と「地域の生活」

私の友人で国文学者の石原千秋氏は、川崎市の計画規模1万人のニュータウン、星が丘パークランドに住んでいるのだが、団地を居住地に選んだ理由を次のように言っている。

「私がニュータウンを選んだのには、はっきりとした理由があった。戸建てで育った私の世代には、鉄筋の団地はいかに「文化的」に見えていたからだし、ニュータウンが理想の都市というよりも未来都市に見えていたからだった。一度は「文化的な団地生活」(?)を味わってみたいと思っていたからである」

彼が「星が丘パークランド」を選んだのは、通勤の便という要因もあったが、未来都市に暮らしながら同時に地域の生活というのも手に入れたと思っていたからである（実はこれはいまもいかなかったということが後で分かった）。この地域の生活というのはコミュニティと言い換えてもよいのかも知れない。多くの郊外住民は、ここにあるような新しい生活の形を手に入れようと思うと同時に、そこで新しい地域社会というものもつくっていかうという意思を持っていたのであろう。ただ、郊外はどのような意味の地域社会なのかというのは議論の余地がある。これについては後述する。

戦後住宅の「モデル」としての団地

団地というのは、間取りを見れば分かると思うが、差し当たり住宅不足を解消して多くの人々が持ち家に辿り着くまでの踊場のような場所として構想されてきたわけである。従って、「次は戸建て」という前提でつくられている。こうした団地を大量につくったことが、「今、団地をどうするのか」という問題の背景に存在していると思われる。

これは郊外だけではなく都市部の問題でもあると思うのだが、「都市に人はどう住むのか」ということのビジョンについては、やはり日本では明治時代から今日まで上手い具合に考えられて来なかったのではないかと思う。その時その時の問題に対処するような形でつくられていたわけであるが、人が街に住むということはどういうことなのか、郊外に住むということはどういうことなのかという、それこそ文化や社会としての郊外や都市についてのビジョンが、上手く形成されて来なかったのではないかと思っている。

「団地が未来都市のモデルであった」とはどういうことなのか。今となつては当たり前のことであるが、ダイニング・キッチン、リビング・ルームがあり、nDK や nLDK という間取りが一般化していく。シリンダー錠付きのドアやアルミサッシの窓がある。ステンレスの流し台、ガス湯沸かし器、水洗トイレがある。これらが先進的に団地に取り入れられ、このため団地はすごく憧れの的になったわけである。シリンダー錠があつてドアを閉めたら完全にプライバシーが守られる。プライバシーといつても壁は薄かったのだが、当時としては画期的なことであつた。こうした団地をモデルにして成立していたスタイルというのが、その後一般の戸建て住宅に広がっていくことになる。

これには、住宅産業の工業化ということが背景にある。つまり、土地の大工さんがその土地に合った形の住宅をつくるのではなく、全国的に標準化されたパーツや規格で家がつくられるようになったわけである。皆が団地の先に戸建て住宅を夢みていたわけである。戸建て住宅の仕様自体が団地化していく。その意味で団地が持っていた意味はきわめて大きいと思われる。

「団地ライフ」から「郊外生活」へ

当時の団地には一定額以上という所得制限があつたので、高学歴のホワイトカラーが最新式の文化生活を送った場所であつた。また、競争率も非常に高かつたので、選ばれた家族としての団地だつた。

私が郊外の社会学の研究をした時に、『日本団地年鑑（首都圏版）』という本を早稲田の図書館で見付けた。日本住宅公団が出資して設立した会社らしいのだが、団地新聞社というところで出版していた年鑑である。その中に、新しい団地風景のグラビアがあつて、モダンで非常に抽象芸術的なパブリックアートが団地の中に沢山建っていたりする。当時の団地の遊具は、私もよく憶えている。小学校入学前の頃、家の近くに比較的大きな規模の団地が出来たのだが、コンクリート打ち放しの遊具がバアーンとあつて、すごくお金をかけていると思われた。今の団地の遊具はどこかの工場で作ったプラスチックのものをボンと据えて出来上がりだが、当時はその場で左官屋さんが塗って立派な遊具を建てていたので、すごいなと思つた記憶がある。そのような新しい文化的生活の空間、新しいモダンな公共空間までつくつていこうという意思が当初はあつたのだと思う。

また、「団地ビジネスにどのようにして成功するか」ということも団地年鑑には載っている。高学歴のホワイトカラー層の心を掴むにはどうしたらよいかというようなことや、ステレオの所有率が高い、知的な関心が高い、あるいは車の保有率が当時の平均に比べると団地族のほうが高い、といったことが書かれている。その後普通になっていく「合理的で近代的な生活」が、先取的に実現していくような場所として団地というものが当時は存在していた、ということがこの年鑑をみると分かる。今、例えば昭和 30 年代ブームなどで団地が回顧される時に、懐かしさのようなもので語られることが多いのだが、当時は最先端の場所として団地は存在して

いたということである。

郊外は「コミュニティ」か？

こうした団地やその周りに一戸建ての郊外住宅地などが建てられていくことによって、先程みたような広大な広がりとして郊外が成立していったわけである。そして、そこは都心に通う雇用労働者や核家族の居住空間である。これはつまり、居住地に生活の基盤を持たない人たちが集まっているということをお話しているわけである。特に世帯主の場合は、居住地以外に出勤しているので、帰属意識が極めて薄い。

「コミュニティ」という言葉はいろいろな訳語がある。そのひとつは「共同体」であるが、郊外が共同体であるかということ、団地も含めてシリンダー錠とサッシによってプライバシーが確保されるというあり方自体が象徴しているように、たぶん郊外地域は、コミュニティというよりもある種の「集合体」としてスタートしたのだと思う。

互いに「異なる」人たちが、都心との間や郊外の内部を日常的に「移動」しながら一緒にいるという意味で、違う人たちが動きながら、しかし生活のベースを置いているような場所、すなわち「共異体=共移体」— これは私の造語なのだが — として、郊外というものがある。郊外化の初期よりも、たぶん今日のほうがこの色彩は強くなっているのだと思う。郊外化の初期の第一世代には、この土地で新しいコミュニティをつくらうという意思があつたり、生活インフラが絶望的に欠落していたりしたため、どうしても隣近所と協力しなければならない事情があつたのである。

『日本団地年鑑』で読んでなるほどと思ったのだが、当初団地には自治会というものが無かつたらしい。住宅公団、あるいは60年代当時の一般的な感覚として、町内会や自治会というものは戦前の隣組のようで良くないと、そのような封建的なことはやめて市民個人のベースでやっつけようという雰囲気であつたらしい。ところが団地に入居してみると、集団的に対応しなければならないことがいろいろある。物を購入する生協運動もそうであるし、多くの団地では電話を引くことも難しく、組合をつくって組合電話を引こうということを切っ掛けにして自治会が出来たこともあつたようである。

自治体活動に限らず、例えば、団地の中で自動車クラブができたり、ゴルフの団地対抗コンペが行われたりということがあつたらしい。このように、初期の団地第一世代あるいは郊外の一戸建てでもニュータウン第一世代の場合には、一種のコミュニティ志向があつた。逆に、現在の郊外の方が、ここで私が「共異体」と呼んでいるような色彩が、むしろ強くなっているように思われる。

郊外の祭り、祭りとしての郊外

先程、郊外化は歴史を消失すると述べたが、例えば、もともとあつた神社の祭りなどが衰退していく所も沢山ある。しかしながらその一方で、団地や郊外住宅地は新しい祭りを組織する

場合がある。特に、小さな子供たちが沢山いて子育て世代が大量にいた 70 年代頃には、各地の団地や地域で手作りのお神輿を作るなどしてお祭りが盛んに行われた。地域に根ざした共同性と神の居ない場所であっても、個人の合理的な生活や未来志向の生活で支えられない共同性や帰属意識を産出しようとする運動（集合的な試み）がそこにはあったのだらうと思われる。

私が生まれ育った町田市の場合には、先にも述べたように 70 年代から市民祭が催されたのだが、当時の町田市民祭の趣意書（図表 7）はこの点で興味深い。

「文明の恩恵に浴しながら物質的には恵まれた生活をしているが、皆は物足りないのではないか。市内にはこのような現代の風潮を何とか打ち破りたいと考えている人が多いのではないか」。

「お互い同士の通い合いを感じるような機会や場を今まで持つことができなかったので、市民一人ひとりが担い手になって … 」

これがたぶん当時のポイントだったと思う。神のための祭ではなくて、「市民一人ひとりが」何かを持ち寄ってお祭りにしましょうということである。市の中でいろいろな活動をしていた人たちが中心となり、市役所の若いスタッフが協力してお祭をやろうということになったのである。

当初はどのようなお祭になるか全然予想がつかなかった。確か秋だったと思うが、週末の 2 日間位、予想を超えて多くの人々が集まった。私の記憶だと、町田市が目抜き通りを歩行者天国にして開催されたのだが、歩いてもなかなか進まないほどものすごい数の人出であった。当初は 5 万人の予想が 20 万人来たとき当時の記録に書かれている。この会場は町田市の駅前が目抜き通りであったが、23 万人の個展から 81 年の 30 万人の個展まで続けられ、特に当初は市民一人ひとりの持込でいろいろな企画を実施するというを基本に催され、大変に盛り上がっていた。

コミュニティがコミュニタスだった頃

これを社会的あるいは人類学的に解釈すると以下のようなことが言えよう。

人類学者のヴィクター・ターナーの「コミュニタス」という概念がある。社会には構造とコミュニタスという二つの局面があつて、構造というのは日常の安定した秩序、それが流動化する状況がコミュニタス。つまり、人と人が構造を超えて交流しあうような状況のことをコミュニタスと呼ぶ。儀式や祭りはコミュニタスで、社会は構造としては安定するけれども、構造を維持していくためにも時々コミュニタスの状況も入れて構造を更新していく必要があるという。

そうすると、戦後高度成長期に郊外化が進んでいった時代というのは（勿論、郊外というのは先にも述べたように日常生活の空間であるのだが）、ある意味で大規模な社会実験が進んでいたようなもので、今まで地域社会が無かった場所で新しいライフ・スタイルをつくっていきうという人たちが大量に出てきて、そこに住むこと自体がある種のコミュニタス的な流動的か

つ祝祭的様相を呈した時代ではないかと解される。私が 1970 年代に直面した町田の市民祭の熱気というのは、郊外の中に伏在していた新しい生活を皆でつくっていかうという、今までの農村社会の生活でもなく、人々を当てにしてきた地域の暮らしでもない、新しい生活の場をつくらうという共通の熱気のようなものがあつたのではないかと思うわけである。

私と同年齢の政治思想史家である原武史氏が 2007 年に、『滝山コミュニン 1974』という変わった本を出した。これは東京西部に公団が造った滝山団地を舞台に、小学校の中である種のコミュニンが教育実践を通じて生み出されたという事実を記した書物である。タイトルは、連合赤軍の元メンバーだった坂口弘氏の『浅間山荘 1972』に引っ掛けたタイトルだと思う。つまり、戦後左翼の歴史は、新左翼の浅間山荘のあの壊滅的で悲惨な出来事によってとりあえずピリオドを打たれたということになっているけれども、実はコミュニン運動などの新しい社会の実験というものは、団地の日常の中で主婦や日教組系の教師に担われ行われていた。原氏はその中でとても嫌な目に遭い、団地から逃げ出すために中学受験をして進学する道を選んだというようなことが書かれている。

また、革新自治体が当時は増加した。旧住民層ではない新住民たちが新しい社会をつかっていかうという意思とともにある場所として、戦後の郊外というものがあつたのだと思われる。

ここで私が重要だと思うのは、郊外の第一世代は、もともとの地付きの旧住民だけではなく、新住民であっても、故郷の記憶や地域社会の記憶がまだあつた世代である。従って、それらの人びとのなかには地域のつながりをつくり出していくようなノウハウのようなものがあつたので、それらと新しい理想や夢を結び付けて新しい地域（＝コミュニティ）をつくらうとしたのだと思う。こうした原体験が大きかつたのではないか。しかし、私たちのような郊外の第二世代、あるいは私の子供の世代は、そのような原体験自体が無いので、郊外という場所自体のあり方がまた変わってきているのではないだろうか。

「コミュニティ」とジェンダー

先程紹介した東京圏の社会地図にも関わっていた都市社会学者の玉野和志氏、浅川達人氏が、東京近郊のコミュニティの調査を調査票に基づいて行っている。玉野氏は田園都市線沿線の青葉台やあざみ野辺りの主婦の運動を調査したのだが、コミュニティというのはジェンダーによって「全日制市民」としての女性・子供と、「夜間・休日市民」としての男性に分断されていて、しかも、夜間・休日市民は、夜間は寝ているし、休日はパチンコやゴルフなどをしているので、やはり地域の住民ではないわけである。これに対して、私にも子供がいるので、子供がいると地域との関わりがいろいろ出てくるのが分かるのだが、全日制市民は学校や地域の活動を媒介にして不覚的に地域に関わらざるを得なくなってくる。実は、都市社会学では 60 年・70 年代にコミュニティ研究が盛んになり、市民運動や住民運動の研究が行われているが、こうした活動の担い手の中心は主婦層であつた。しかも、これは先程の話とも関係するが、玉野氏

の言葉を借りると「田舎や戦前のコミュニティ経験がある専業主婦が担い手になっている」。つまり、仕事を辞めて地域で生きていくことを選択し、地域の中で新しい社会をつくっていくことが女性としての役割である、というジェンダー化された意識のもとにこの研究は行われている。

現代の若い主婦層は、子育てが終わればまた働きに行こうと思っている人が多く、地域へのコミットメントの度合いが低い。そうすると、70年代あるいは80年代前半位まで、市民活動や住民運動（生協運動・地域の教育運動）が活発であった地域において、今後も同じようにコミュニティの再生産が行われていくかどうかは分からないということである。都市インフラが絶望的に未整備だった所に住宅地が広がっていったので、コミュニティバスを走らせて欲しいなど、困ったことがあるとそれを市に要求するなど、人々は仕方ないから協力する。そのようなことが解決してしまった現在、地域においてコミュニティが成立するのだろうかという問題がある。

つまり、同じ地域であっても、そこにどのような社会が成立するかというのは、そこに住んでいる人々の来歴、社会意識、価値観や、そこでどのような問題を抱えているかによって変わってくる。別の言い方をすると、結集させるためにある種の問題をつくってやるというものひとつのやり方であろう。そうした条件が変わっていく中で「今後の郊外はどうなっていくのだろうか」ということがこれからの課題になっていくのだろうと思われる。

展示される団地と郊外

ひとつのエピソードであるが、郊外や団地が今や博物館（松戸と流山の市立博物館）に展示されるような時代になってきている（図表 8）。これまで述べてきたような郊外化は過去の歴史になってしまい、昭和 30 年代ブームで団地モデルが話題になっているような時代であるが、その中で現代の郊外はどうなっているのだろうかということを考えてみたい。

おしゃれな郊外住宅地は何を示すのか・虚構化する街、演技化する生活？

（図表 9・10）は、我が家の近所の写真と公告のキャッチコピーである。「ウィーンの小さな街がお手本です」。これはウィーンのハイリゲンシュタットがモデルらしいのだが、雑木林と江戸川があるのでウィーンの森とドナウ川に譬えてよいのだろうか、と私は思う。それから、「妻を女優にする街。」「ここに住まう家族を主役としたドラマ」、「約束された未来へ」。ザ・フォレストカーサは流山おおたかの森近くの住宅地である。一戸 6,000 万円位だったか。「演技」やある種の「虚構」、おしゃれではあるが、住むことがある種の演技として、演出として捉えられているような、そのような売り方をしている。

次に団地をみると（図表 11）、多摩ニュータウンのベルコリーヌ南大沢だが、かつての団地とは違い南イタリアの山岳都市をイメージした団地である。実はひどい欠陥建築で、目下、大々的に建替えが進んでいる。このような団地が 80 年代の後半には造られていた。あるいは、こ

れも我が家の近くの写真(図表 12)であるが、ガーデニングが施された家があったり小人の人形が飾られたりしている。90年代頃、住宅地に小人が増えてきたのが気になり、一時期小人の写真を撮って集めていたのだが、生活のリアリティとは全く違う、ディズニーランドのような暮らしをつくり上げようとしているような価値観がこの頃表出してきたのだと思う。同時に、パステルカラーで白い玄関ポーチの柱があったり、白い出窓があったり、そのような家が80年代後半から90年代頃に増加していく。ショートケーキのように可愛いので「ショートケーキ・ハウス」などと言われたりしている。また、クリスマス・イルミネーションによって住まいを演出するような試みが日常化していく。

第二次郊外化と消費社会

1970年代から80年代頃に、「渋谷パルコ」に代表されるような消費空間の演出が話題になり、それが都市空間・都市再開発の基本的技法になってきている。つまりテーマパークのように何らかのコンセプトで街をファッションablな空間としてつくり上げていく。それが日常生活の空間としての郊外にまで広がっていったのが1980年代半ば以降の郊外であるというのが、私の解釈である。

すなわち、消費社会的なものが非日常の消費空間から日常の中に広がっていったのが80年代半ば以降である。それは同時に、個人主義化した核家族が自分の趣味をユートピア的に演出するような空間としての郊外が展開されることであった。先程述べたように、地域の連帯や協力によって地域をつくっていきこうというのではなく、「私の素敵な暮らしを演出する舞台としての郊外」に変わってきたのではないか。

更に、家庭の中でも各自が個室の中に撤退していくようになる。これはインテリアブームやインテリア雑誌のブームに現れている。学生からの卒論の相談でも部屋についてやりたいというのが多い。「私はインテリアが趣味なんです」という男子学生が結構いて、友だちがいかにかキメキメのすごい部屋をつくっているかというような話しをしてくれる。この場合も家族は問題ではなくて自分の部屋だけが問題なのである。こうした個人が自分の趣味を演出して、ある種のフィクショナルな生活を追求していくような場所が変わっていったのではないかということである。

理想の時代／夢の時代／虚構の時代

こうしたことを考えるための補助線として、社会学者の見田宗介氏(『社会学入門』)による、「現実」の対になる言葉を手がかりとした、戦後日本社会の時代区分を紹介したい。見田氏は、1945～60年は「理想の時代」、60～75年は「夢の時代」、75年からは「虚構の時代」ではないかと言っている。つまり、人々が「理想」の社会を目指した時代から、個人の「夢」のマイホームを求めているような、個人化したファンタジーになっていくような時代を経て、さらには、そのようなことは実現しそうもないので、嘘でも良いから楽しいもので演出していきこうと

いう「虚構」と人が戯れるようになった時代になる。そこには感性の変化があったのではないかとやっている。これはそのまま住宅地にも言えるのではないかと思うわけである。

郊外の「理想」、「夢」そして「虚構」化

未来都市としての団地・ニュータウン計画は、戦後郊外化の「理想の時代」に対応するものだったと思われる。これに対して、住宅双六の郊外一戸建て住宅と持ち家政策が支配的だった時代は「夢の時代」で、ショートケーキ・ハウスとポストモダンな団地が広がっていく風景というのは「虚構の時代」、と言えるのではないかと思う。

また、「共同幻想」「対幻想」「自己幻想」というのは吉本隆明氏が『共同幻想論』の中で使った言葉であるが、これに当て嵌めると、「地域＝共同幻想」としてのコミュニティというのが人々にとってリアリティを持っていた時代、「家族＝対幻想」としての住宅が人々にとってリアルであった時代、さらには「個人＝自己幻想」としての個室だけがリアルだがフィクショナルな空間になっていく時代へと遷り変わっていったとも言えよう。これはつまり、理想としての共同幻想よりも対幻想や自己幻想における欲望の充足がリアルなものとなり、コミュニティがコミュニタスだった時代が終わってしまったということではないだろうか。

「～万人の個展」のアイロニー

しかし、考えてみると、先程述べた「コミュニティがコミュニタスだった時代」の町田市の市民祭につけられた「～万人の個展」という名前自体が、既にそのようなことを予告している。結局、これは「個展」なのである。共同幻想であっても個々の自己幻想の言葉でしか表現することができず、共同性というものそれ自体をポジティブにイメージすることができない。コミュニティという言葉自体がすごく曖昧で捉え処がないということは、1970年代から繰り返し批判されてきたことである。それ以前の村や町内などと比べて、非常にバタ臭く手応えがないわけであるが、戦後の郊外化の過程はコミュニティという言葉自体の内実の無さのようなものが露呈していった過程であるとも言えるのではないか。つまり、変な言い方になるが、皆が別々であることが共通項であるような、そのような場所であったということである。

マス・イメージと消費という共同性

先程紹介した三浦展氏は、かつてパルコが出していた雑誌『アクロス』の編集長であったのだが、その『アクロス』では「80年代～90年代には東京近郊は新しい山の手になる」というようなことを言っていた。結局それは、今みてきたように、大衆消費社会化の意味論に郊外住宅地の日常が呑み込まれていった、ということではないかと思われる。私が郊外について興味を持ちはじめた90年代頃から、いろいろな住宅地に行くと、ディズニーランドや遊園地に紛れ込んでしまったような所が増えてきて、眩暈がするような思いであった。

こうした中で、地域の歴史や文化から遊離し商品化した希望やイメージが郊外を覆っていった。これらは情報化や消費化の中で消費されるイメージなのである。考えてみれば、我々は自

分の生活を様々な消費材を取り込んでつくり上げていく。その中で、ファッションナブルな生活のイメージがパッケージ化された商品として売り出されるようになったのが、80年代半ば以降の住宅地なのだと思う。

多摩ニュータウンの団地の変遷が語るもの 機能⇒家族⇒個人⇒虚構

多摩ニュータウンの団地の変化をみると（図表 13）、「プラスワン住宅」という、人が集って住むような形から個人の趣味を展示するためのスペースが設けられたり、タウンハウス形式で一戸建てに近いようなものが建てられたりしている。さらに、ポストモダンな団地、ちょっとデザインに凝ってみましたという形のものも現れる。家族から個人の趣味、それからフィクショナルな未来都市のような空間へ、というように遷り変わってきているのが分かる。

「演技するハコ」の時代

上野千鶴子氏は「住宅は家族を容れるハコ」と言っている。その「ハコ」は、戦後の歴史の中で理想や夢や虚構を入れてきたハコであった。今はそれが演技するハコになってしまい、演技する人や演技する地域、演技する社会と共にあるようなのが現状だと上野氏は言う。

現代の郊外を横断する

T X（つくばエクスプレス）沿線地図（図表 14）をみると、一言で「郊外」と言っても地域や場所によって多様なあり方をしている。

例えば、足立区の場合（図表 15）、足立区は東京 23 区であるが、ブルーカラー層が沢山住んでいる郊外住宅地がある。知人の都市社会学者の言葉を借りると、「青い郊外」である。八潮と三郷（図表 16）は、柏よりも東京に近い地にありながら、これまで交通の便に恵まれていなかったため陸の孤島のような所であった。しかし、ここもスプロール化が進み、「青い郊外」から「白い郊外」へ転換していこうとしている。流山おおたかの森（図表 17）は「妻を女優にする街」。柏の葉キャンパス（図表 18）では三井不動産が中心となって 36 階建ての高層マンションや「ららぽーと」を造ったりしているが、これからどうなるか興味深いところである。守谷（図表 19）は、70 年代に自立型ニュータウンを指向していたが、常磐線を使い東京に通勤する人たちのベッドタウン化していき（常総ニュータウン）、T X の開通により、決定的に東京郊外に組み込まれることになってしまった。つまり、70 年代的なニュータウンの理想が挫折した場所である。つくばのみらい平（図表 20）は、住宅展示場のような住宅地である。ここへ行ってみるとすごく不思議な感じがする。つくばにこんな家を造って本当に大丈夫なのだろうかと思うのだが、このような家が広がっている。そして、つくばセンター（図表 21）。これはご承知のとおり首都機能分散のために造られた街であるが、T X によって東京の郊外に組み込まれつつある。

郊外の「社会の地層」

このように、これまで郊外という同じ言葉で語ってきたが、必ずしも均質ではなく、「青い郊外」と「白い郊外」があったり、交通のラインによる飛び地があったり、質的な多様性があったりする。

模式化してみると、社会の中にも地層のようなものがあり（図表 22）、郊外や都心を取り囲む異なる時期に開発された異なる様相を持つ場が、いろいろな重なりと広がりとしてある。しかもそこには階層やジェンダー、世代の多元的な分散があるということである。

住むことの偶有性、住むことの商品化

郊外に住む人たちというのは、住むことの必然性をそれほど感じていないのではないかな。つまり、郊外に住むこと自体は、ある種の必然であったかも知れないのだが、都市の雇用労働者にとっては郊外のどこに住むかということは、手持ちのお金と通勤時間と今どこの住宅が買えるかということによって偶々決まった場所であり、偶々決まった場所に偶々住み、そこである時代には地域社会への理想を持っていたけれども、それが夢になったり、アイロニカルに虚構と戯れるような時代になったりした。そのような歴史を辿ってきたのだと思われる。

要するに選べない中から選んで、そこで生きて子供を育てて老いていく。そのこと自体は必然だったと思うが、大部分の人たちは家を主体的には選べず、与えられた選択肢の中から自分の財布と見合った形で選んでいくしかない。だから、住民たちがつくったとも言えないような形でつくり上げていくような場所として、地域というものがあつたのだと思う。そのような場所が大量の分厚い広がりとしてつくり出されていったということである。

郊外の「終わり」？

この後、郊外はどうなるのだろうか。高齢化の先進地としての郊外、団地、ニュータウンというのがあつた。それから都心回帰もある。都心や生活充足のための施設へのアクセスの悪い郊外住宅地やニュータウンはたぶん衰退していくと思われる。

それでは、郊外は衰退していくのだろうか。私は、郊外自体は収縮するけれども終わりはしないと思っている。つまり、高齢化や衰退する郊外もあり、スクラップ・アンド・ビルドはどうしてもしなければならず、コンパクトシティ化が言われている中で、郊外自体もコンパクトサバードという形になっていかなければならないと思うのである。

しかし、衰退する郊外がある一方で、TX沿線のように新たに形成される郊外というものもある。そこでブランド化され世代再生産していくような郊外と、そうではない郊外との分化・選別が、たぶん進むのだろうと思われる。だが、ライフ・スタイルや文化としての郊外は、その郊外地域の淘汰や収縮があつても終わりはしないのではないかと考えている。

危機／転機としての高齢化・情報化

私自身は高齢化・情報化というものが、郊外の危機であると同時にひとつの転機になるので

はないかと思っている。最初の方でも述べたが、郊外の高齢化は税収減と福祉負担増で、自治体としては結構大変なことである。ただし、全日制市民というのがそこでは増加していく。コミュニティがコミュタスだった時代に、郊外において第一世代の担い手だった人たちが郊外に復帰していく。そこで一旦バラバラになった郊外を、どのようにして地域として捉え直すことができるのかということが、たぶんこれから全日制市民になっていく人たちの課題であり責任ではないかと思うわけである。

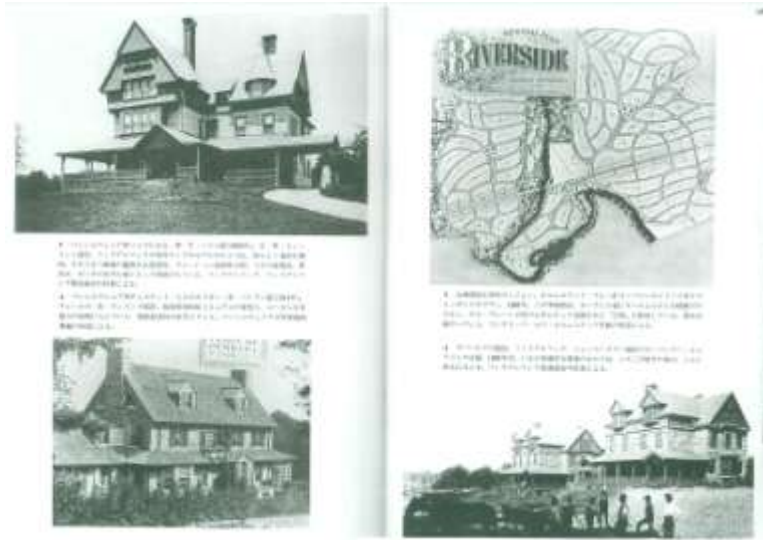
情報化という言葉も、しばしば社会の中で地域や場所の持つ意味を衰退させていくような展開として指摘されるようなことがある。しかし、情報化によって、昔はミニコミなどもつくるのが大変であったが、今はブログやホームページが簡単につくれるようになったので、地域の内外を発見して繋ぐことを活性化するものとして、情報化を利用していくということも出来ると思われる。

地域社会のコミュニティは、場所を媒体にした社会であると思うが、場所の媒体性を重層的に高めていくということ、つまり、場所の中での人の繋がりを媒介するものとしてのメディアを重層的に高めていくことが、結局、郊外という地域を社会として作り上げていくうえで重要なキーになるのではないかと最近考えている。

(図表 1)

合衆国における「古典的郊外」

(ロバート・フィッシュマン (小池和子訳『ブルジョア・ユートピア』
勁草書房、1990、vii - viii頁より)



(図表 2)

レヴィット・タウン(アメリカ合衆国)

(<http://en.wikipedia.org/wiki/File:LevittownPA.jpg> より)



(図表 3)

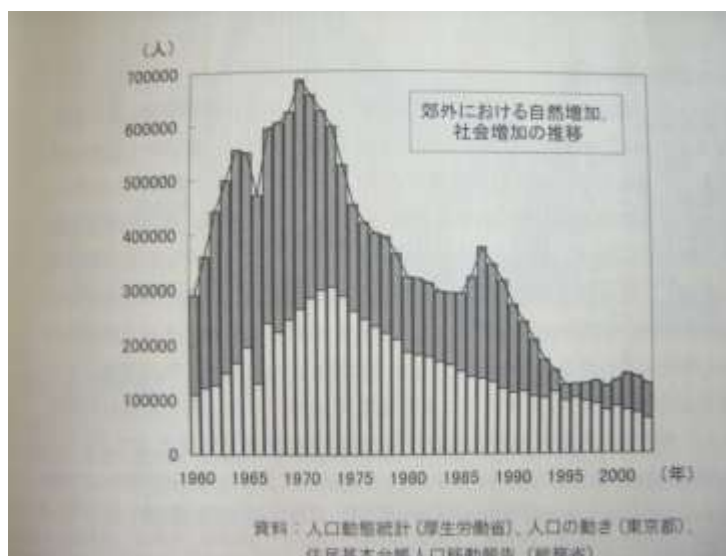
田園都市株式会社の洗足田園都市発売のパンフレット (山口廣編『郊外住宅地の系譜』勁草書房、1987、182頁から)



(図表 4)

戦後日本の郊外化：東京圏の場合

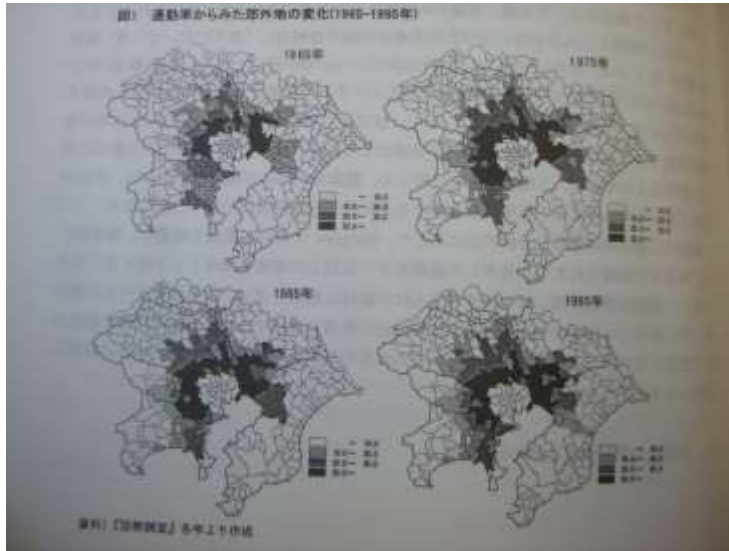
(江崎雄治『首都圏人口の将来像』専修大学出版局、2006、73頁より)



(図表 5)

戦後日本の郊外化: 東京圏の場合

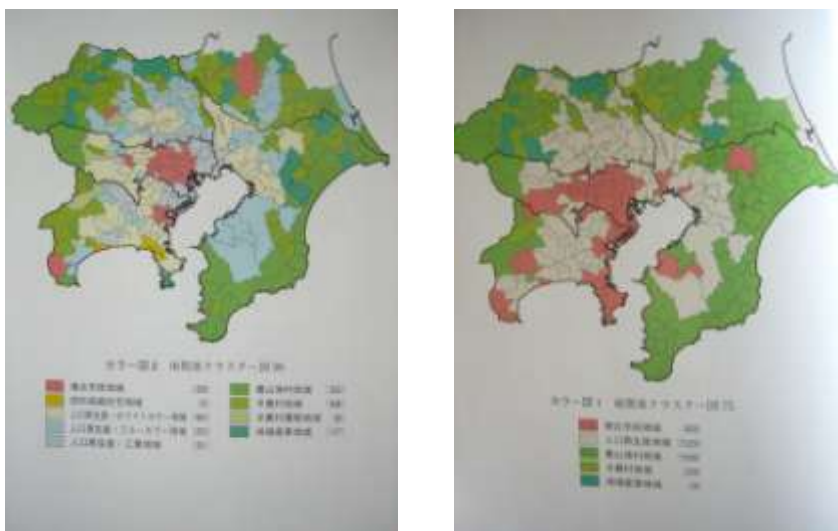
(牛島千尋「東京圏における郊外人口の特徴と居住分化」『日本都市社会学会年報19号、2001、24頁より])



(図表 6)

戦後日本の郊外化: 東京圏の場合

(倉沢進・浅川達人編『新編 東京圏の社会地図 1975 - 90』東京大学出版会、2004、4 - 5頁より)



(図表 7)

町田市民祭「23万人の個展」開催趣意書から

「私たちは日頃、文明の恩恵に浴しながら物質的には一応恵まれた暮らしをしているように見えます。しかし、その反面文明の産物にしばられてときには、型にはまって個性や可能性を見失ったり、キュウクツな思いにかられることがしばしばあるように思われます。また物質文明のもとでは、ともすると人と人とのつながり意識がうすれてしまったり、私たち自からの手で何かをすることを忘れがちになってしまうようです。市内には現代のこうした風潮を“何とかして打ち破りたい”このように考えている人びとがたくさんおられるのではないかと考えています。」

「町田市は近年、とみに人口が増えています。しかし町田市という一つの単位の中で集い合って毎日を送りながら、私たちは果して、お互い同志の通いあいを感じるような機会や場をいままで持つことができたでしょうか。そこで私たちは、町田市民祭という場で市民ひとりひとりが祭りの担い手となることができるような、そして多くの人々が誰とでも言葉を交わすことができるような、そして、みんなの個性や善意が一つ所に示されるような、そんな祭りの催しをぜひ実現させたいものです。」

小高照男『楽しい人間都市づくり——東京・町田市に見る市民参加』町田ジャーナル社、1976、61-62頁より重引

(図表 8)

展示される団地と郊外



(図表 9)

おしゃれな郊外住宅地は

何を示すのか？



- 「ウィーンの小さな街がお手本です」
- 「上質という未来へ」
- ブランズガーデン江戸川台

(図表 10)

虚構化する街、演技化する生活？



- 「妻を女優にする街。」
- 「ここに住まう家族を主役としたドラマ」
- 「約束された未来へ」
- ザ・フォレスト・カーサ

(図表 11)

ポストモダン化する団地？

ベルコリーヌ南大沢



(図表 12)

ガーデニングとイルミネーション：

個展会場化する郊外住宅地



(図表 13)

多摩ニュータウンの団地の変遷が語るもの：機能⇒家族⇒個人⇒虚構



(図表 14)

現代の郊外を横断する

:TX(つくばエクスプレス)を事例として



- 2005年開業の、首都圏でもっとも新しい郊外電車。
- 東京・秋葉原から、浅草、北千住、埼玉県の八潮、三郷、千葉県の流山、柏を通過して、茨城県・つくば研究学園都市までを45分ほどで結ぶ。
- 地図は日本経済新聞社編『つくばエクスプレスがやってくる』日本経済新聞社、2005年より。

(図表 15)

足立区六町：23区内の「青い郊外」



(図表 16)

八潮と三郷： 陸の孤島から郊外への組み込みへ



(図表 17)

流山おおたかの森：里山から郊外へ



(図表 18)

柏の葉キャンパス： 郊外自治体の中の「新しい郊外」



(図表 19)

守谷：
自立型ニュータウンから東京郊外へ



(図表 20)

みらい平：模型のような街



(図表 21)

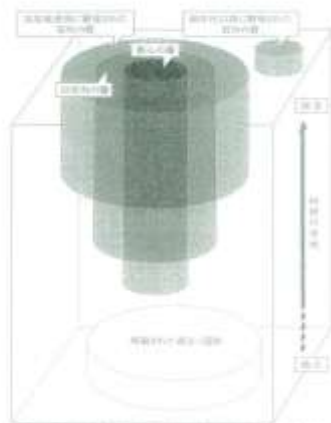
つくばセンター： 首都機能分散？ 郊外への組み込み？



(図表 22)

郊外の「社会の地層」

若林幹夫『郊外の社会学』ちくま新書、2007、97頁より



郊外の社会的階層や地層は、過去の社会史が反映されている。郊外の地層の上は、最先端層から中間層、後進層へと形成されている。「郊外」は、都市の中心部から遠く離れた地域であり、都市圏を形成する重要な要素である。

- 社会の中にも「地層」が存在する。
- 郊外は、都心を取り囲む、異なる時期に開発された、異なる様相をもつ場の重なりと広がりとして存在している。
- 郊外の階層的、ジェンダー的、世代的な多元並存構造。